



続:午睡とピクニック #3



ふありの書斎

2024年6月8日 20:00

ぼくは、水をひとくち含み、ゆっくりと瞳を閉じる。

「そうなんだ、その今は無きMO-VEの、出版社で新入りのスタイリストをしていたのが、こゆりだったんだ」

姉さんが^{どうもく}瞠目する。

「まさか...だってはっきり言わせてもらうけど、まだ未成年でしょ？」

「あはは。やっぱりそう思うよね。若く...というより、幼気な印象だから...」

ぼくは、再び、水を含んで、先を続けた。

「で、そのMO-VEで、働いていたのは19歳のときで、アルバイト感覚だったのかな。もともと、箱入り娘だったせいか、おっとりして、世間知らずの女の子だった。仕事も、殆ど素人だから、業界用語が、分からなかったり、小さなミスが目立った。...ぼくが、初めてこゆりに出会ったのも、そんなミスの中だった」

「...ミスの中...？」

姉さんは、怪訝そうに眉を寄せて、ぼくの瞳を凝視する。

「...うん。小さな出版社だったから、とにかく生き残るにはトレンドを重視して、海外セレブのトレンドで押してた。けど、小規模予算では限界も近かった。だから、海外セレブを引っ込める代わりに、国内の人気トップモデルを表紙で飾る方針に変換^{かい}。専属モデルまではいかないけど、毎号当時の有名モデルは依頼が来ていたんじゃないかな。甲斐も1回ぐらいは仕事したことあると思うよ」

「え...甲斐くんも？私の所には仕事の依頼は無かったわよ」



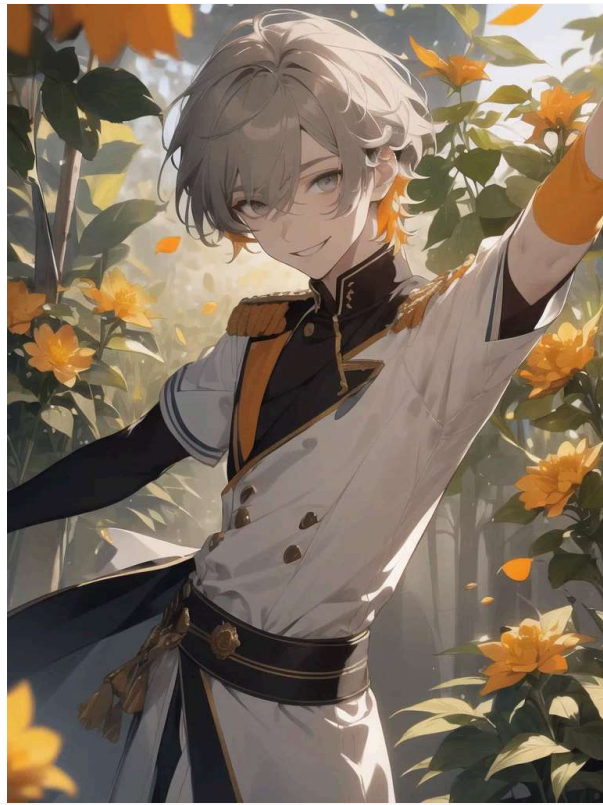
いつかAoiを超えてやる！

「...それは、多分、MO-VEが、メンズ向けの雑誌だったからだよ...ちょっと話がズレるけど、小さな撮影所の、狭い廊下の、横に設けられた個室で、三流のメイクアップアーティストから、化粧をしてもらって、さあ、仕事だと気合を入れ、メイクルームから出たら、そこに、こゆりが居たんだ」

「...居た？」

姉さんが首を傾げて、ぼくを見つめる。

「う〜ん。居た、という表現より、その場に座り込んでいた、というのが正しい表現かな...。その日、ぼくが着る予定の衣装をキャリーケースにパンパンに詰め込んで、そのせいで、ケースの中からの圧力に負けて、バンって勢いよく開いて、衣装が通路に散乱しちゃって。困り果てたこゆりが、床にうずくまっているのを、ぼくと鉢合わせ。でも...な



モデルKaiお仕事モード

ぜか怒る気がなくて。色合わせのキレイな服の海に埋もれていたから」

『服の妖精さん、大丈夫？』

冗談めかして、ニコツと笑いかけると、こゆりが顔を真っ赤にして、

『...もしかして、あの...モデルの^{よしづきあおい}葦月 碧さんですか？』

可愛かったなあ。凄く緊張している様子で、消え入りそうな小さな声で。

『...ごめんなさい。...あなたが今日着る洋服、散らかしてしまっ...』

『...ぼくの服？』

『一生懸命選ばして頂きました。葦月さんに似合いそうな...』

そこに、MO-VEのトップスタイリストっていうのかな...が、現れてド派手なレッドヘアだったのを覚えてるよ。

彼女は、

『その...彼女は、まだ新入りで...ほら、こゆり、頭下げて！』

殆ど、土下座に近いくらい、こゆりの小さな頭を下に押し付けて、

『それに何このトレンドガン無視の服。ワタシが用意しろって言った服はどこよ？』

こゆりは、頭を押さえつけられて苦しそうに、

『でも...葦月さんには...この服のほうが...似合うと思って』

『馬鹿言ってるんじゃないわよ。アンタ、何様のつもり？ここでは、アンタの主観なんて、どーでも良いのよ。トレンドよ。トレンドを、素敵に着こなしてくれるトップモデル様なんだから。この服は、とっとと処分して。葦月様をお待たせするなって言っているの』



白い花々と戯れるこゆり

そのレッドヘアは、床に散乱した服の中から、白い、シャツを一枚拾って、怖いね、ビリビリに破いたんだ。こゆりの目の前で。

『アンタが、選んだ野暮服で、表紙飾って、それで、人気下がって、出版社が潰れたら、アンタ責任取れんの？生半可な仕事するなら、クビだからね。アンタの代わりなんて、この世にいくらでも居るんだから』



あまりの侮辱に、ぼくはカチンって頭に來ちゃって...先輩スタイリストから破れた白のシャツを取り戻した。

『いないよ、こゆりちゃんの代わりは。一人も居やしないよ』

って、冷たく言っちゃった。その数日後だったかな、MO-VEのスタジオにこゆりの姿が見当たらなくて。心配になって近くのスタッフに訊いたら、こゆり、MO-VE、クビになっていた。姉さん、ぼくは嬉しかったんだ、トレンドの服ならショップのマネキンだって着こなせる。でも、ぼくという人間に似合う服を選んでくれたのは、こゆり一人だけだった。仕事の依頼は、出来るだけ誠意を持って受けていたけど、MO-VEのやり方は酷かったから。ぼくは、無責任と言われようと、あの社の仕事は全て断った。ゲストモデルが居なくなって、ぼくの他に何人かモデルを起用していたみたいだったけど、結果、MO-VEは、3ヶ月持たずに潰れたよ。でもね、ぼく一人が原因ではなく、同じモデル仲間も、あそこでは二度と仕事したくないって、そんな雰囲気だったんだ。それに、社そのものの、運営の根本的なものが酷く、イメージを汚したんだと思う。読者は敏感だからね...ん？」

ぼくが、寢室のドアをのの方を見ると、こゆりが、顔を真っ青にして、ちいさな身体を震わせていた。

「...こゆり、起きていたの？」

ぼくは、ソファから立ち上がってそばに行こうとすると、こゆりが、両手のひらをグッと前に押し出して、首をふる。

「...あおちゃん...今の話、本当？わたしなんかの為に...MO-VE潰れちゃったの？あおちゃんが、モデル辞めちゃって...そんな...そんなっ...」

こゆりは、いやあ！っと、叫ぶと、突然玄関の方に、素足のまま、駆け出した。ぼくは、慌てて後を追った。

続:午睡とピクニック～#4に続く～

文 ふうりの書斎

イラスト 月猫ゆめや様